（データ）高校生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る（その４）

要約

これまで社会人・大学生におけるパーソナリティ特性（勤勉性・外向性・経験への開かれ）の職場適応や能力、学びと成長に及ぼす影響を明らかにしてきた。本レポート（その４）では、高校生を対象に同様の調査を行い、これまでの知見が高校生にも認められるかを検討した。以下の２点が明らかとなった。

①これまでのレポートで報告したことと同様に、目的変数によってパーソナリティ特性の影響の及ぼし方は異なっていたが、全体的に勤勉性・外向性・経験への開かれの及ぼす影響は高校生を対象にした本レポートでも認められる。

②大学生・社会人を対象としたこれまでのレポートではすべて通っていた、勤勉性から経験への開かれの有意なパスが本分析では通らなかった。他方で、社会人・大学生と同様に、経験への開かれが深い学習・AL 外化・探究活用力・資質・能力に直接的な大きな影響を及ぼしていた。高校生を対象にした、パーソナリティ特性の深い学習・AL 外化・探究活用力・資質・能力へ及ぼす影響において、勤勉性・外向性と経験への開かれが構造的に別次元のものであるかは、今後別のデータで検証する必要があると考えられた。

③外向性のみ男女差が認められた。女性が男性に比べて外向性が高いと言える。

第１節　問題

学校から仕事・社会へのトランジション研究において、パーソナリティ研究におけるビッグファイブ論から「勤勉性」「外向性」「経験への開かれ」の３つのパーソナリティ特性を取り出し、その影響について検討している。パーソナリティ特性はさまざまな研究で用いられているテーマ横断的な心理変数であり、現代社会に適応し、学び成長する人の特性を学校・仕事・社会を跨がって、さらには青年期・成人期・中年期・老年期を跨がって検討するのに有用であると考えられる。

これまで、大卒以上・正規雇用の社会人を対象とした検討（レポート［その１］）、中卒以上・正規非正規雇用の社会人を対象とした検討（レポート［その３］）、大学生を対象とした検討（レポート［その２］）をレポートしている（注１）。対象によってパーソナリティ特性の影響の及ぼし方は若干異なるものの、概してパーソナリティ特性（勤勉性・外向性・経験への開かれ）が学びと成長あるいは職場適応や能力に影響を及ぼすこと、その中でもとくに経験への開かれが大きな影響を及ぼすことが明らかとなっている。

本レポート（その４）では、高校生を対象に調査を行い、これまでの知見が高校生にも認められるかを検討することを目的とするものである。

（注１） レポートは以下を参照。
・「(データ）パーソナリティ特性からみる社会人の場適応や能力（その１）
http://smizok.net/education/subpages/a00034(personality5).html
・「(データ）大学生の学びと成長をパーソナリティ特性から見る（その２）」
http://smizok.net/education/subpages/a00044(uni_ptype2).html
・「(データ）非正規従業員のパーソナリティ特性は正規従業員のそれに劣るか（その３）」
http://smizok.net/education/subpages/a00045(ptype3_extended).html

第２節　調査について

調査は、インターネットリサーチ会社（株式会社クロス・マーケティング）に依頼して、2021 年 1 月に実施された。高校 1 年生（男子 150 人、女子 150 人）、２年生（男子 150 人、女子 150 人）、計 600 人が調査に参加した。平均年齢は 16.31 歳（*S.D.*=.645）であった。なお、以下の結果で扱う調査内容・変数については、本レポート最後の資料①で説明している。

第３節　結果と考察

図表１に変数間のピアソンの相関係数を示す。**図表２**に、勤勉性から外向性・経験への開かれを媒介して、深い学習・AL 外化・探究活用力・資質・能力を説明するモデルを作成し、パス解析（共分散構造分析）を行った結果を示す。性の影響を見るため、目的変数である深い学習・AL 外化・探究活用力・資質・能力に統制変数としてパスを引いている。図表で示すパス係数はすべて５％以上の水準で有意であった。分析には、IBM SPSS Statistics，AMOS Version 25.0 を使用した。

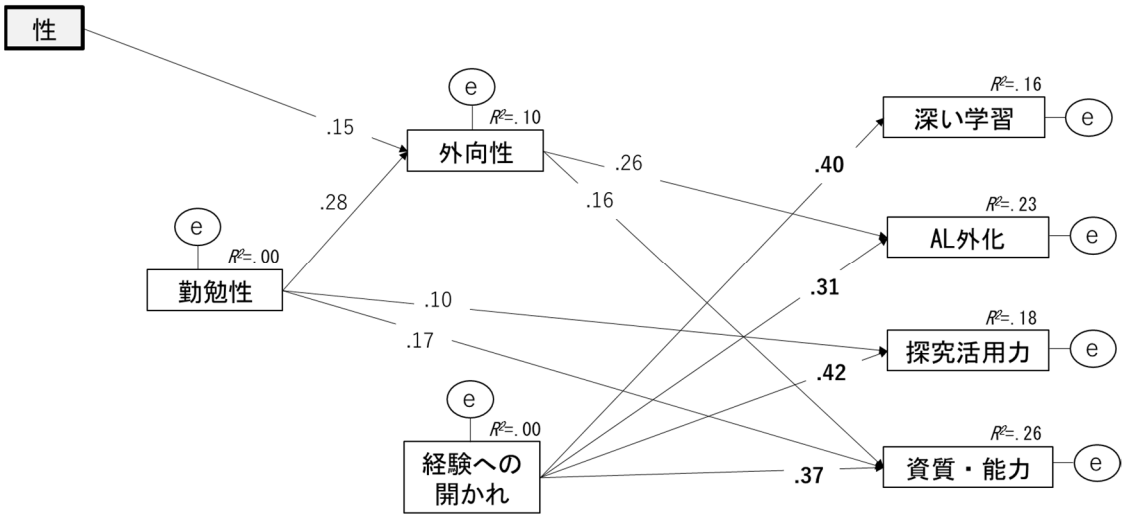
図表２の結果からわかることは以下の通りである。

- これまでのレポート（注１）で報告したことと同様に、目的変数によってパーソナリティ特性の影響の及ぼし方は異なっていたが、全体的に勤勉性・外向性・経験への開かれの及ぼす影響は高校生を対象にした本レポートでも認められる。
- 大学生・社会人を対象としたこれまでのレポート（注１）ではすべて通っていた、勤勉性から経験への開かれの有意なパスが本分析では通らなかった。他方で、社会人・大学生と同様に、経験への開かれが深い学習・AL 外化・探究活用力・資質・能力に直接的な大きな影響を及ぼしていた（.31～.42）。高校生を対象にした、パーソナリティ特性の深い学習・AL 外化・探究活用力・資質・能力へ及ぼす影響において、勤勉性・外向性と経験への開かれが構造的に別次元のものであるかは、今後別のデータで検証する必要がある。
- 外向性のみ性の影響が認められた（.15）。値も大きく、女性が男性に比べて外向性が高いと言える。

図表１　変数間のピアソンの相関係数

	勤勉性	外向性	経験への開かれ	深い学習	AL外化	探究活用力	資質・能力
勤勉性	－						
外向性	.261**	－					
経験への開かれ	－.068	.386**	－				
深い学習	.013	.120**	395**	－			
AL外化	.078	.374**	.410**	.395**	－		
探究活用力	.090*	.214**	.409**	.515**	.388**	－	
資質・能力	.203**	.348**	.423**	.434**	.481**	.468**	－

* p<.05　** p<.01



図表２　パス解析の結果

*図表では省略しているが、パス係数はすべて５％以上の水準で有意である。また、.30 以上のパス係数を太字にしている。
*モデル適合度は $\chi^2(11)=2.872, p<.01$, $CFI=.980$, $RMSEA=.056$ である。

謝辞

本レポートは、公益財団法人電通育英会の研究支援助成を受けて行われたものです。長年にわたって支援してくださる電通育英会の皆さまに心よりのお礼を申し上げます。

資料①：調査票（本レポートの該当項目のみ）

●性

男性=1, 女性=2

●（尺度）Big Five 尺度

【説明】パーソナリティ特性論（パーソナリティが複数の特性［次元］から記述されるという立場からのアプローチ）の研究の発達に伴って、パーソナリティは大きく５つの特性で説明できると考えられるようになっている。本レポートでは、和田（1996）の「外向性」「情緒不安定性」「誠実性」「調和性」「開放性」の５因子から成る Big Five 尺度の中から、「誠実性」「外向性」「開放性」の３因子を使用している。因子名は、「勤勉性」「外向性」「経験への開かれ」と命名し直している（以上、詳しくはレポート（その１）(注1) の第１節を参照）。

【教示文・項目】

「以下のことばがあなた自身にどのくらいあてはまるかについて、最も近い番号を選んでください。」

（1）話し好き
（2）独創的な
（3）いい加減な
（4）無口な
（5）多才な
（6）ルーズな
（7）陽気な
（8）進歩的
（9）怠惰な
(10) 外向的
(11) 洞察力のある
(12) 成り行きまかせ
(13) 暗い
(14) 想像力に富んだ
(15) 不精（ぶしょう）な
(16) 無愛想な
(17) 美的感覚の鋭い
(18) 計画性のある
(19) 無頓着な
(20) 頭の回転の速い
(21) 軽率な
(22) 人嫌い
(23) 臨機応変な
(24) 勤勉な
(25) 活動的な
(26) 興味の広い
(27) 無節操
(28) 意思表示しない
(29) 好奇心が強い
(30) 几帳面（きちょうめん）な
(31) 積極的な
(32) 独立した
(33) あきっぽい
(34) 地味な
(35) のみこみのはやい
(36) 社交的

①まったくあてはまらない　②あまりあてはまらない　③少しあてはまらない　④どちらともいえない ⑤少しあてはまる　⑥まあまああてはまる　⑦非常にあてはまる

【得点化】赤字の逆転項目を反転させて、加算平均（合計して項目数で除する）を行う。

・勤勉性（12 項目）：3, 6, 9, 12, 15, 18, 21, 24, 27, 30, 33, 36　（α=.763）
・外向性（12 項目）：1, 4, 7, 10, 13, 16, 19, 22, 25, 28, 31, 34　（α=.874）
・経験への開かれ（12 項目）：2, 5, 8, 11, 14, 17, 20, 23, 26, 29, 32, 35　（α=.884）

【出典】和田さゆり（1996）. 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成　心理学研究, *67 (1),* 61-67.

●深い学習アプローチ

【説明】河井・溝上（2012）で開発した「学習アプローチ尺度」の中から「深い学習アプローチ」の下位尺度を使用。

【教示文・項目】

「以下のそれぞれの項目内容は、あなたにどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを 1 つ選んでください。」（6 件法）

（1）できるかぎり他のテーマや他の授業の内容と関連させようとする

（2）授業で学んでいることについて、自分なりの結論を導くための根拠を注意深く調べる

（3）私は、授業内容の意味を自分で理解しようとする

（4）授業のための読書の際、著者の意味することを自分から正確にわかろうとする

（5）自分がすでに知っていることと結びつけて、授業内容の意味を理解しようとする

（6）様々な見方を考慮して、問題の背後にあることを理解することが、私にとって重要だ

（7）新しい考えを理解するとき、それらを現実生活と結びつけようとする

（8）学術的な読書の中で新しい考えに出会ったときは、じっくり考え抜く

①まったくそう思わない　②ほとんどそう思わない　③あまりそう思わない　④少しそう思う ⑤まあまあそう思う　⑥とてもそう思う

【得点化】加算平均（合計して項目数で除する）を行う。（α＝.896）

【出典】河井亨・溝上慎一 (2012). 学習を架橋するラーニング・ブリッジングについての分析－学習アプローチ、将来と日常の接続との関連に着目して－　日本教育工学会論文誌, 36 (3), 217-226.

●アクティブラーニング外化（AL 外化）

【説明】溝上他（2016）で開発された、アクティブラーニングの「外化」という行動から、学習が「気づき」「内化」を経て理解として深まるプロセスまでを含み込んだ尺度である。AL 外化は全体で 13 項目の尺度であるが、そのうち以下に示す 3 項目が Bifactor モデルのグループ因子として抽出されている。全体の 13 項目とも高い相関を示す因子である。なお、開発された AL 外化尺度は大学生向けのものなので、本研究の調査では教示文の冒頭を「学校で～」と変えて実施した。

【教示文・項目】

「学校で、話し合いや発表のある授業に対して、以下の項目のような態度をどの程度とっていますか。それぞれの項目について、もっとも近い選択肢を 1 つ選んでください。」（4 件法）

※そういう授業が全くなかった人は、「あてはまらない」を選んでください。

（1）議論や発表の中で自分の考えをはっきりと示す

（2）根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う

（3）クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える

①あてはまらない　②どちらかといえばあてはまらない　③どちらかといえばあてはまる
④あてはまる

【得点化】加算平均（合計して項目数で除する）を行う。（α=.864）

【出典】溝上慎一・森朋子・紺田広明・河井亨・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳（2016). Bifactor モデルによるアクティブラーニング（外化）尺度の開発　京都大学高等教育研究, *22*, 151-162.

●探究活用力

【説明】登本・溝口・溝上（投稿中）で開発した高校生版の探究習得尺度の中から「探究活用力」の下位尺度を使用。８項目（投稿中なので項目は非公開）。α＝.757。

●資質・能力

【説明】溝上（2015）で用いた高校生向けの自己評定式の資質・能力 18 項目を、大学生、社会人にも適用して用いている。因子分析の結果をふまえて、「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」の 4 因子の得点を加算平均（合計して項目数で除する）して用いている。

【教示文・項目】

「最近のあなたを振り返って、下記の能力や事柄がどの程度身についたと感じますか。」

（1）計画や目標を立てて日々を過ごすことができる
（2）社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる
（3）リーダーシップをとることができる
（4）図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たりわからないことを調べたりすることができる
（5）他の人と議論することができる
（6）自分の言葉で文章を書くことができる
（7）人前で発表をすることができる
（8）他の人と協力して物事に取り組める
（9）コンピュータやインターネットを操作することができる
(10) 時間を有効に使うことができる
(11) 新しいアイディアを得たり発見したりすることができる
(12) 困難なことでもチャレンジすることができる
(13) 人の話を聞くことができる
(14) 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる
(15) 人に対して思いやりを持つことができる
(16) 忍耐強く物事に取り組むことができる
(17) 異文化や世界に関心を持つことができる
(18) 自分を客観的に理解することができる

①まったく身についていない　②あまり身についていない　③まあまあ身についている
④かなり身についている

【得点化】溝上（2015）では、因子分析の結果をふまえて「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」の 4 因子の得点を加算平均（合計して項目数で除する）して用いているが、本レポートでは各次元を細かく分析するほどの問題設定を行っていないことから、18 項目の加算平均で分析を行っている。（α=.923）

【出典】溝上慎一（責任編集）　京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）(2015). どんな高校生が大学、社会で成長するのかー「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプー　学事出版